

# Message

## 館長からのメッセージ

図書館長 ローリー ゲイ



## オープンリサーチの可能性

科学・技術の様々な分野において、研究成果や研究データのアクセスに料金を課さず、電子コンテンツとしてウェブ上で無料提供する必要性、いわゆる「オープンサイエンス」が論じられて久しい。その理念（の一つ）は、公的資金は国民からの税金により運用されるものであるから、公的資金による研究成果に国民は無料でアクセスできる権利があり、研究成果の公開により広く社会に貢献すべきである、というものである。

2022年4月に科学技術振興機構（Japan Science and Technology Agency、文部科学省の競争的資金の配分機関の一つ）が、研究成果の取扱いに関する基本方針とガイドラインを改定したニュースが報道された。具体的には、

- 一、研究プロジェクトの成果に基づく研究成果論文は、原則オープンアクセス（以下、OA）化し、特に査読済み論文は原則として出版後12ヶ月以内にOA化すること
- 二、研究成果論文のエビデンスとなる研究データは原則として公開すること

という二つの方針が発表されている。<sup>1)</sup>

いつから研究成果論文や研究データのOA化を義務化するかなど、詳細はこれから決まるようだが、すでに発表されているガイドラインによると、対象となる研究プロジェクトも、対象となる研究成果論文も「全て」とされている。<sup>2)</sup>

そもそも日本文学の研究者である私は自然科学・社会科学における動向を知らないのだが、深澤良彰前図書館長にご教示いただいた情報によると、科学・技術分野ではずいぶん以前から、最終成果だけではなく、「プレプリント」（査読を通過して正式な論文として発表される前段階の原稿）としてインターネット上で公開・共有することが普通になっている。1990年代から多くの分野でプレプリントを保存するための「プレプリントサーバー」も発達している。<sup>3)</sup>

人文学の分野においても、公的資金を獲得した研究者にOA義務を課せられることは時間の問題だろう。「オー

「オープンサイエンス」から「オープンリサーチ」の時代はすぐそこまで迫ってきている。ご存知の方は多いが、海外でも「オープンリサーチ」への動きが盛んである。European Research Council (ERC、ヨーロッパ連合の科学技術振興機構) は2014年以降の全ての公的資金を受ける研究者に「Each beneficiary must ensure open access (free of charge online access for any user) to all peer reviewed scientific publications relating to its results」(下線引用者) という条件を課している。<sup>4)</sup> カナダも医療の分野では2008年から、他の分野では2015年から同条件を公的資金を受ける研究者に課している。<sup>5)</sup>

一人一人の研究成果論文を査読付きOAジャーナルに出版する、もしくは科学研究費補助金の一部を Article Processing Charge (APC、論文出版料) に充ててハイブリッドジャーナルにOA論文として出版することはわかりやすい。図書館も研究推進部によるOA論文出版支援と連携しており、2020年より Cambridge University Press 誌なら APC 費用全額免除、2021年より Elsevier 誌なら APC 軽減としている。<sup>6)</sup> 現時点ではこの二社だけであるが、さらに可能性を模索している。

名のある大学出版会も最近査読付きOA書籍出版に乗り出し、カリフォルニア大学出版会の Luminos シリーズ (<https://www.luminosoa.org/>) はその一つである。コロナ禍中、このシリーズの一冊、近世日本の家族についての論文集『What is a Family? Answers From Early Modern Japan』(<https://www.ucpress.edu/book/9780520316089/what-is-a-family>) を即座にダウンロードできたことはありがたかった。

人文学の分野の研究者として、OA論文・OA書籍を出版する他に、研究成果をどのように公開し、社会に貢献できるか、早稲田の卒業生の例の一つ取り上げてご紹介したい。レベッカ・クレメンツ氏は、早稲田大学大学院文学研究科の修士課程修了後英国ケンブリッジ大学で博士号を修得、現在スペインのバルセロナ自治大学で ERC より公的資金を得て数人の研究者、博士課程の学生を含む大きな研究プロジェクトを率いておられる。テーマはいわゆる「文禄・慶長の役」、韓国語では「壬辰倭乱」と呼ばれる、16世紀の世界で最も大きな戦争が東アジアへもたらした長期的な影響についてである。その研究チームはそれぞれの分野でOA論文を出版している他、Webサイトで多言語のデータベースを公開し<sup>7)</sup>、そして最近ウェブ展示会も開催している。『Stories of Clay』(<https://aftermath.uab.cat/stories-of-clay/>) で日本に拉致された陶器職人の歴史、作品、影響などが映像とその説明文だけではなく、専門家による短いレクチャーとともに語られ、学生向きのワークシートをダウンロードすることで教育にも貢献している。

科学・技術分野で研究しておられる皆様はもちろん、人文学研究者の皆様にとっても「オープンリサーチ」の世界は無限の可能性を秘めている。図書館はできる限り協力してまいりたい。

1) “オープンサイエンス促進に向けた研究成果の取扱いに関するJSTの基本方針。” 国立研究開発法人科学技術振興機構。2022-04-01。 [https://www.jst.go.jp/pr/intro/openscience/policy\\_openscience\\_r4.pdf](https://www.jst.go.jp/pr/intro/openscience/policy_openscience_r4.pdf), (参照 2022-04-19)。

2) “オープンサイエンス促進に向けた研究成果の取扱いに関するJSTの基本方針ガイドライン。” 国立研究開発法人科学技術振興機構。2022-04-01。 [https://www.jst.go.jp/pr/intro/openscience/guideline\\_openscience\\_r4.pdf](https://www.jst.go.jp/pr/intro/openscience/guideline_openscience_r4.pdf), (参照 2022-04-19)。

3) 船守美穂。“変わりゆくプレプリントの機能。” 国立情報学研究所 オープンサイエンス基盤研究センター。2020-09-05。 <https://rcos.nii.ac.jp/miho/2020/09/20200905/>, (参照 2022-04-19)。

4) “OPEN SCIENCE.” European Research Council。2022-04-02。 <https://erc.europa.eu/managing-your-project/open-science>, (参照 2022-04-19)。

5) “Tri-Agency Open Access Policy on Publications.” Government of Canada。2016-12-21。 [https://science.gc.ca/eic/site/063.nsf/eng/h\\_F6765465.html](https://science.gc.ca/eic/site/063.nsf/eng/h_F6765465.html), (参照 2022-04-19)。

6) “オープンアクセス論文の出版に関するサービス。” 早稲田大学図書館。2021-01-25。 <https://www.waseda.jp/library/news/2021/01/25/9234/>, (参照 2022-04-19)。

7) AFTERMATH OF THE EAST ASIAN WAR OF 1592-1598。2022。 <https://aftermath.uab.cat/>, (参照 2022-04-19)。